

「私に今必要なのは仕事！」——ペアレンティング・エデュケーションにおける行動主義的ソリューションと構造的問題、そして隠れたカリキュラム

Maia Cucchiara, Erin Cassar and Monica Clark (2019) “I Just Need a Job! : Behavioral Solutions, Structural Problems, and the Hidden Curriculum of Parenting Education.” *Sociology of Education*, Vol.92 (4), 326-345.

日本大学非常勤講師 柳 煌 碩

1 はじめに

子育てにおける階層差は、既に多くの研究において報告されている。特に貧困状態は、親子間の接触、寛容な子育て態度、子どもへの知的な刺激の側面において欠如を招き、子どもの認知発達や学力に負の影響をもたらすことが明らかになっている。

「ペアレンティング・エデュケーション」は、これらの貧困と子育てのネガティブな関係を断ち切るべく、親を対象として子育てに必要な知識を獲得させ、子育てスキルや態度の向上を目指すものである。そうすることによって、貧困層の子どもの学習不振、少年犯罪、10代の妊娠、ネグレクトなど、家族と教育を巡る様々な問題に対処しようとしているのである。

アメリカにおけるペアレンティング・エデュケーションは、毎年数百・数千の親（特に母親）が参加し、連邦政府の資金援助だけでも年間数億ドルの資金が投与されている。しかし、その効果を検証した研究によれば、ペアレンティング・エデュケーションプログラムが親の過度に厳しいしつけ態度を和らげるなどの効果が見られるものの、子どもの心理的・教育的アウトプットへの効果は極めて限定的であると指摘されている。ただ、全体としてペアレンティング・エデュケーションに対する研究者の関心は十分ではなく、特に社会学的研究上の関心は希薄である。

今回紹介する論文は、こうした問題意識の下、社会学、中でも教育社会学の立場からアメリカのペアレンティング・エデュケーションのリアリティーを描こうとしたものである。著者らは、アメリカ北東部の大都市にある二つの学校と一つのソーシャル・サービス機関において3年に渡るエスノグラフィックな調査（参与観察、面接）を行った。調査協力者の大半は低所得層のアフリカ系アメリカ人である。

著者らが特に注目するのは、ペアレンティング・エデュケーションプログラムにおける「隠れたカリキュラム」である。教育社会学の概念である「隠れたカリキュラム」は、教育の現場において特定の内容が選定・強調され、また一方で特定の内容を排除・回避することによって、生徒に対して暗黙のうちに特定の規範や価値観を内在化させる営みを指す。著者らは、3年間の調査から得られたデータを基に、低所得層の親を対象とするペアレンティング・エデュケーションの「隠れたカリキュラム」を暴く。

2 明示的カリキュラムと隠れたカリキュラム

調査対象となった三つの場所（二つの学校、一つのソーシャルサービスセンター）の教育プログラムは、全て低所得層の親をターゲットとし、科学的研究結果に基づくカリキュラムを設けていた。

それぞれの教育プログラムの目標やアプローチは互いに似ており、子どもの言語的発達・遊び・読書・感情表現・自尊心の促進を目指すものであった。また、各カリキュラムは、親たちが日常生活で実践できる、あるいは実践すべき事柄に焦点を当てており、そのため用いられているのは、発達心理学や児童心理学の理論に基づく知識であった。

教育を担うインストラクターは能力開発関連の研修を受けており、調査に協力したインストラクターたちは、皆アフリカ系アメリカ人であった（中年女性、20代女性、40代男性）。インストラクターらは、教育プログラムに参加した母親たちに「子どもは宝物」「子どもにポジティブな言動を取る」「体罰を避ける」「子どもの感情表現を促す」「子どもに対する関心を高める」といった態度と心構えを一貫して推奨していた。

これらは、「望ましいペアレンティングとは、子ど

もに対する愛情に基づき、寛容な態度で子どもの成長と発達を促し、知的な刺激を与えるものである」という現代社会のペアレンティング規範と共鳴するものであり、表立って公開されたペアレンティング・エデュケーションの「明示的なカリキュラム」として位置づけられる。

しかしその一方で、調査の対象となった教育プログラムには明示的ではない「隠れたカリキュラム」が存在する。代表的には「貧困は、良い子育ての障害にはならない」というメッセージの意図的あるいは非意図的な発信が挙げられる。そのメッセージは二つの方法で発信される。一つは、「母親の経済的状況が子育てと関連する」という話題に触れない「沈黙」という方法であり、もう一つは、貧困に関する話題が出た場合でも、構造的な問題を指摘するよりは、親の個人的対処や個人的責任を強調する話に話題を逸らす「リフレーミング」という方法である。

講師たちは、母親たちが置かれた貧困、暴力、就業問題についての話題を極力抑え、あるいは逆境の中でも愛情を込めた子育てが如何に重要であるかを力説する。そして、貧困層の子どもたちが犯罪や社会的不適応を起し、親と同様に貧困という地位に陥ることは、専ら十分で適切な子育てが出来なかった親、またそういう親がいる機能不全家族の責任であるというメッセージを暗示し続ける。こうした、構造的問題を軽視し、個人的責任を全面に押し出す「隠れたカリキュラム」は、調査が行われたいずれのペアレンティング・エデュケーションプログラムでも見られていた。

3 貧困に悩まされる親たちと子育て

他方、この研究に参加した母親たちは、アメリカで最も貧しく、厳しい環境で子育てをしている人たちである。失業・貧困・劣悪な居住環境・食糧不足・暴力・犯罪は彼女たちの日常のすぐ近くに溢れていた。

ペアレンティング・エデュケーションに参加した母親たちは、新生児の粉ミルク代や哺乳瓶代に苦しみ、友人や家族と共有する狭い住宅でネズミと戦い、近隣で鳴り響く銃声、そして頻発する殺人事件と共に子育てをしている。こうした状況にいる母親たちにとって、「子どもの発達を促すための良い子育てスキル」というものは、彼女たちの個人的努力やコントロールでは辿り着けない、遠く離れた場所にあるものに他な

らない。

彼女たちにとって最も大きな課題は、「最低限の基本的な養育が可能かどうか」それ自体であり、子どもの認知発達を刺激することや、より良い子育てのためのスキルではないのだ。それ故、ペアレンティング・エデュケーションに参加した母親たちは、自らが受けた親のための教育プログラムの効果に「何も変わっていない (Nothing, the same.)」と冷淡な評価を下し、「私に今必要なのは仕事。それだけなの (I just need a job. I need to get a job.)」と語るのである。この母親の語りは、ペアレンティング・エデュケーションと母親たちが置かれた現実の間にある溝を典型的に表すものであると言えるだろう。

4 おわりに

本研究はペアレンティング・エデュケーションの「隠れたカリキュラム」に着目し、そこから（意図的か否かに関わらず）作り出される個人主義的規範、そして貧困と「悪い子育て」を結びつける規範を浮き彫りにしている。著者らの立場は、ペアレンティング・エデュケーションの有用性そのものを否定しているわけではないが、その中に含まれている欠点や恵まれていない家庭に向けて発信される社会のメッセージに疑問符を付け加えるというところにある。そして、彼らの疑問符には、貧困や失業・犯罪などの構造的問題を個人の振る舞いや心構えの矯正を通して対処しようとする、社会問題の「教育化 (educationalization)」に対する懸念が含まれている。

本研究が描いた「社会問題の教育化」の様相は、アメリカに次ぐ相対的貧困率を「誇る」日本に対しても対岸の火事ではない。家庭への行動主義的介入を通じて社会問題を解決しようとする動きの一端は、既に「家庭教育支援法案」の導入を巡っても見られている。貧困とその再生産に対する行動矯正的な介入ではない、労働や収入の保障を通じたより間接的な、しかしよりシステムティックな取り組みの重要性を再認識する上で、本研究が持つ示唆点は多い。

りゅう・ふあんそく 日本大学非常勤講師。最近の主な論文に「現代韓国の公的親教育プログラムにおける子育てモデル——親教育プログラム参加者へのインタビューを中心に」『比較家族史研究』34, 80-112 (2020年)。教育社会学専攻。